

## ■ 論 文 ■

## Iペトロ書におけるマカリズム（幸いの宣言）

原 口 尚 彰\*

## 抄 録

Iペトロ書はマカリズム（幸いの宣言）の文学形式を用いる際に大変柔軟な態度を示している。人称について言えば、旧約聖書や新約聖書に通例用いられる三人称ではなく、二人称複数形を用いている（Iペト3：14；4：14を参照）。しかも、形容詞μακάριοιは、文頭でなく、文中や（Iペト4：14）文末に（3：14）置かれている。

Iペトロ書のマカリズム（3：14；4：14）は苦難が神意であり、苦しむ信徒は神の承認を受け、栄誉を受けていることを強調して幸いを語る。聖霊が信徒の上に留まっていることこそ、神の承認のしるしなのである（4：14）。これらのマカリズムは信徒たちに対して彼らは決して不幸ではなく、神の前では幸いとされていることを語る。

**Key Words** : Iペトロ書, マカリズム（幸いの宣言）, 苦難, 栄誉, 聖霊

## I. 問題の所在

新約聖書中のマカリズム（幸いの宣言）は、文頭にμακάριος / μακάριοιという言葉置き、その後には幸いとされる根拠またはその状態の描写が続く文学形式であり、ヘブライ語のמָשִׁיחַをμακάριος / μακάριοιと訳した七十人訳の用語法に倣ったものである<sup>1)</sup>。幸いの宣言は、福音書や使徒言行録等の物語文学にも（マタ5：3-12；11：6；13：16；16：17；24：46；ルカ1：45；6：20-23；7：23；10：23；11：27，28；12：37，

38，43；14：14，15；23：29；ヨハ13：17；20：29；使20：35），書簡文学にも（ロマ4：7，8；14：22；Iコリ7：40；ヤコ1：12，25；Iペト3：14；4：14），黙示文学にも見られる（黙1：3；14：13；16：15；19：9；20：6；22：7，14）<sup>2)</sup>。しかし、従来の研究は山上の説教中と平野の説教に出て来るマカリズム（幸いの宣言）の分析に集中しており、新約聖書に出て来る他のマカリズム（幸いの宣言）については、新約各書の注解者たちが短くコメントするに留まり、十分な検討がなされてこなかった<sup>3)</sup>。私はこの研究史上の欠落を埋めるべく、数年前から旧約聖書やユダヤ教文書におけるマカリズムや、Q資料及び共観福音書におけるマカリズムや、ヨハネの黙示録における

\* Haraguchi Takaaki  
東北学院大学文学部教授

マカリズム、さらには、使徒教父文書におけるマカリズムの分析に従事しており、学会発表や一連の論文を通してその成果を発表してきた<sup>4)</sup>。本研究は、初期キリスト教のマカリズムの全体像を解明する一環として、これまでに行って来たマカリズムの上に立って、公同書簡に属するIペトロ書（Iペト3：14；4：14）におけるマカリズムの使用例の積義的・神学的分析を行うこととする。

## II. I ペトロ書におけるマカリズム（幸いの宣言）

### 1. I ペト3：14

本文：ἀλλ' εἰ καὶ πάσχετε διὰ δικαιοσύνην μακάριοι.

（たとえ義の故にあなたがたが苦しむことがあっても、幸いである）。

このマカリズムの文体は、定型からかなり離れており、形容詞μακάριοιは文頭ではなく文末に出て来ている。また、幸いとされる状態を名詞的に使用される分詞ではなく、εἰに導かれる副文で表現している（4：14も同様）。人称について言えば、公同書簡の並行例であるヤコブ書のマカリズムが三人称を用いているのに対して、このマカリズムはIペト4：14と共に二人称複数形を用いている。マカリズムは通例三人称の形で書かれるが（詩1：1；32 [31]：1-2；84 [83]：5-6；シラ14：1-2；25：8-9；マタ5：3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10；ロマ4：7, 8；14：22；Iコリ7：40；ヤコ1：12, 25；黙1：3；14：13；16：15；19：9；20：6；22：7, 14；ディダケー 1.5；バルナバ 1.2；10.10；Iクレ40.4；48.4），初期キリスト教文書には二人称で書かれた例も見られる（マタ5：12；16：17；ルカ6：20, 21, 22；ヘルマス『幻』2.2.7；『喩え』9.29.3）。二人称を用いる場合は対話的な性格が強まり、聴衆へ語り掛ける効果が高まる<sup>5)</sup>。

Iペト3：14は善い行いをする事を勧める章節（3：8-22）の中に置かれ、3：8-22全体は以

下のように3部構成となっている。第1部（3：8-12 他者への愛の実践の勧め）と第2部（3：13-17 善を行うこと、苦難に動揺せず、弁明への備えをすること）は、読者に愛の実践と苦難に耐えて善を行うことを勧め、第3部（3：18-22 キリストの苦難と死の意義）はこれらの行動の根拠として、苦難の生涯を送ったキリストの生涯を回顧している<sup>6)</sup>。

3：8-12 他者への愛の実践の勧め

3：8 他者に共感を持ち、友愛に励むこと

3：9 悪に悪を報いず、祝福を与えること

3：10-12 いのちを望む者が悪を離れるべきこと（詩34：13-17）

3：13-17 善を行うこと、苦難に動揺せず、弁明への備えをすること

3：13 善に熱心な者となること

3：14a 義のために苦しむ者へのマカリズム（幸いの宣言）

3：14b 迫害者を恐れないように勧める

3：15-16 キリスト者の生き方：キリストを崇め、弁明する準備があり、良心を持つ

3：17 善いことを行って苦しむ方が、悪を行って苦しむことよりも良いこと

3：18-22 キリストの苦難と死の意義

3：18 罪人のためのキリストの苦難と死

3：19 囚われている霊への宣教

3：20 ノアの箱舟と8人の救い

3：21 洗礼の意義：キリストの復活によって救いを与える

3：22 キリストの高挙と即位

3：14が置かれている第2部3：13-17（善を行うこと、苦難に動揺せず、弁明への備えをすること）は、当時のギリシア・ローマ世界で少数者であったキリスト教徒が、信仰故に経験する誹謗や問責に対する心構えを語っている。義のために苦しむことがあっても幸いであると宣言するIペト3：14は、善いことを行って苦しむ方が、悪を

行って苦しむことよりも良いことを告げる3:17と呼応して、主題上の囲い込み構造を形成している<sup>7)</sup>。

Iペト3:14が苦難の誘因として挙げる「義(δικαιοσύνη)」とは、3:13に従って、「善に熱心な者(τοῦ ἀγαθοῦ ζηλωταί)」となることや、3:16が言う通りに、「キリストにある善い生き方(τὴν ἀγαθὴν ἐν Χριστῷ ἀναστροφὴν)」を実践することや、3:17が言うように、「善いことを行う者たち(ἀγαθοποιοῦντας)」となることと同じ事柄を指していると考えられる<sup>8)</sup>。つまり、キリスト教徒として相応しい生き方をしようとする時に社会の側から加えられる誹謗や迫害が、「義の故にあなたがたが苦しむ」のこの具体的内容であろう。こうした、義(δικαιοσύνη)の理解は、マタ5:10に並行する。

神への信仰故に苦難を受ける者に対して終末的幸いを宣言することは、既にダニ12:12のテオドシオン訳やIVマカバイ記に出て来ている(IVマカ7:22)。同様の主題は、山上の説教の第8のマカリズム(幸いの宣言)や(マタ5:10)、ヤコブ書(1:12)や、使徒教父文書や(ポリュ・フィリ23:32; ヘルマス『幻』2.2.7; 2.3.3-4を参照)、外典福音書(トマ福58)において、キリストへの信仰故に苦しむ者の幸いの宣言というキリスト教化された形で登場する。例えば、マタ5:10は、μακάριοι οἱ διωκόμενοι ἕνεκεν δικαιοσύνης, ὅτι αὐτῶν ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν。(幸いである、義のために迫害されている者たち、天国は彼らのものである)となっており、Iペト3:14に主題的には非常に近い。山上の説教のこの箇所に影響を受けたポリュ・フィラ2.3-4は、μακάριοι οἱ πτωχοὶ καὶ οἱ διωκόμενοι ἕνεκεν δικαιοσύνης, ὅτι αὐτῶν ἐστὶν ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ(幸いである、貧しい者、義のために迫害されている者、神の国は彼らのものだからである)となっている。但し、Iペト3:14の文言は、語順や構文の点でマタ5:10とはかなり異なっており、直接の依存関係はなく、当時の教会に流布していた類似の伝承

を用いていると考えられる<sup>9)</sup>。

他方、ヤコ1:12は、μακάριος ἄνθρωπος ὅς ὑπομένει πειρασμόν, ὅτι δόκιμος γενόμενος λήμψεται τὸν στέφανον τῆς ζωῆς ὃν ἐπηγγέλατο τοῖς ἀγαπῶσιν αὐτόν(幸いである、試練を耐え忍ぶ者は、承認されてその方を愛する者に対して約束された命の冠を受けることになる。)となっている。ヘルマス『幻』2.2.7は、μακάριοι ὑμεῖς ὅσοι ὑπομένετε τὴν θλίξιν τὴν ἐρχομένην τὴν μαγὰ λην καὶ ὅσοι οὐκ ἀρνήσονται τὴν ζωὴν αὐτῶν(幸いである、到来する大きな苦難を耐え、その命を否定することの無い者は)と語り、終末時に訪れる苦難に耐え、来るべき世での命を失うことがないように促している。これらの一連のマカリズムは終末における運命の逆転を強調して、今の時において苦しむ者に幸いを宣言している。これに対して、Iペト3:14のマカリズムは、善を行って苦しみを受ける者に終末時の栄光が与えられることが神の意志であることを強調して、幸いを宣言している。著者は、少し先のところで、「もし神の意志がそう望むのなら、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむより良い」(3:17)とも述べているのである<sup>10)</sup>。ここでは、苦難の背後にある神意に注目することで、信徒たちに加えられる不当な仕打ちとは対照的に、神による承認と名誉回復がなされている事実が強調されている<sup>11)</sup>。

現世での信仰故の苦難を神の定めであるとする考えは、「あなたがたは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも与えられている」(フィリ1:29)と述べるパウロにも見られる。Iペトロ書は模範としてのキリストの苦難ということを強調し、善いことを行って苦しみを受けることは、キリストが地上の生涯において経験したことであるから、正しい事のために苦しむことは、キリストの足跡に従うことと考えられている(Iペト2:21-25; 3:18を参照)。キリストは苦難と死を通して、復活と高擧に達したのであるから(3:18, 21-22)、キリストの苦難に与ることはその栄光に与る希望を持つことになる

(4:13)<sup>12)</sup>。

I ペト3:14の少し前に出て来る3:9は、信徒たちが神の祝福(εὐλογία)を受けるようにと召されていることを強調して、自分に悪を働く者、罵る者を祝福するように勧めている。類似の言葉伝承について言えば、迫害する者を祝福する勧めがロマ12:14に見られ、迫害する者のために祈る勧めがマタ5:44に保存されている。他方、I ペト3:9の内容は、義の故に苦しみを受ける者の幸いを宣言する3:14にも似ている。I ペトロ書においては、祝福(εὐλογία)と幸い(μακαρισμός)という起源が異なる概念が機能において相互に接近する現象が見られる<sup>13)</sup>。

神が与える祝福(εὐλογία)は、創世記の族長物語において、土地取得、子孫繁栄と並んで、アブラハム契約の重要な構成要素となっている(創12:2)<sup>14)</sup>。神はアブラハムを祝福する者を祝福し、彼を呪う者を呪うとされている(創12:3ab; さらに、24:1, 35:25:11も参照)。さらに、アブラハムは祝福の基となり、アブラハムを通して地上の全部族が祝福されると宣言される(12:3c; 18:18)。

申命記は祝福のテーマを継承して、ヤハウェが父祖たちに与えると誓った地を祝福し(申26:15)、イスラエルの民を祝福して子孫の数の増大と繁栄を与えるとしている(7:13-14)。申命記は、イスラエルが神の祝福に与る条件として、出エジプトの後に与えられた主の戒めを遵守することを挙げる(申7:6-12; 11:26-32; 28:1-24)。特に、申9:1-30:30に収録されているモーセの演説は、イスラエルの民に対して神との契約に入り、契約の条項である戒めを守れば祝福が与えられ、戒めを守らないならば呪いが下されることを告げ、聴衆であるイスラエル人たちに祝福と呪い、いのちと死との間の選択を迫る(特に、11:26-30; 28:1-14を参照)。申命記的な祝福と呪いの主題は、初期ユダヤ教では特に死海文書に反映が見られる(1QS 2.1-10; 1QSB 1.1-7)。

初期キリスト教になると、祝福を受けることと

律法の遵守とは切り離され、キリストへの信仰が祝福に到る道として提示される。例えば、パウロはガラ3:13において、キリストは律法の呪いの下にある者たちを贖い出したと述べる。アブラハムに約束された神の祝福に与るために律法の遵守は必要なく、キリストを信じることで十分であると主張する(3:8-9, 14)<sup>15)</sup>。さらに、キリストへの信仰に生きる者が、祝福を受けるために、自分を誹謗中傷する者を祝福するように勧めるI ペト3:14は、イエスの教えに従って敵対する他者をも愛することが祝福に達する道であることを示している。

I ペトロ書は、書簡の導入部において、εὐλογητὸς ὁ θεός(神は讃むべきかな)と述べている。この表現は、旧約聖書に遡る典礼的な定型句であり、新約聖書においても神を讃美する定型句として使用されている(ルカ1:68; ロマ1:25; 9:5; I コリ1:3; エフェ1:3)<sup>16)</sup>。七十人訳聖書では、εὐλογητὸς κύριος ὁ θεός(主なる神は讃むべきかな)という表現や(創9:26; 24:27; サム上25:32; サム下18:28; 王上8:15; 詩41 [40]:14; 68 [67]:19; 72 [71]:18; 106 [105]:48; 144 [143]:1), より短いεὐλογητὸς ὁ θεός(神は讃むべきかな)という句や(創14:20; 詩66 [65]:20), εὐλογητὸς κύριος(主は讃むべきかな)という表現が(出18:10; ルツ4:14; サム上25:39; 王上8:56; 詩28 [27]:6; 89 [88]:53; 124 [123]:6), 神を讃美する定型句として使用される。

形容詞εὐλογητόςは旧約聖書以来、神に対して使用するのが原則であり、新約聖書においても人間に適用した例はない<sup>17)</sup>。I ペトロ書もこの区別を維持して、1:3で形容詞εὐλογητόςを用いて神を讃美する一方、3:14と4:14では、形容詞μακάριοςを用いて人間の幸いを語っている。尚、形容詞μακάριοςは、新約聖書では人間に適用され(マタ5:3-12; 11:6; 13:16; 16:17; 24:46; ルカ1:45; 6:20-23; 7:23; 10:23; 11:27, 28; 12:37, 38, 43; 14:14, 15; 23:29; ヨハ13:17; 20:29; 使20:35; ロマ4:7, 8;

14：22；I コリ7：40；ヤコ1：12, 25；I ペト3：14；4：14；黙1：3；14：13；16：15；19：9；20：6；22：7, 14), 神に対して使用された例はIテモ1：11以外にはない。

## 2. I ペト4：14

本文：εἰ ὀνειδίζεσθε ἐν ὀνόματι Χριστοῦ χαίρετε,  
μακάριοι, ὅτι τὸ τῆς δόξης καὶ τὸ τοῦ  
θεοῦ πνεῦμα ἐφ' ὑμᾶς ἀναπαύεται.  
(キリストの名のためにあなたが罵られるならば、喜びなさい、  
幸いである、栄光と神の霊があなたがたの上に留まっているからである)。

このマカリズムの文体も、定型からかなり離れており、形容詞μακάριοιは文頭ではなく文中に出て来ている。このマカリズムはIペト3：14と共に二人称複数形を用いている。幸いとされる状態は、εἰに導かれる副文で表現され、幸いである根拠はὅτιに導かれる副文により与えられている。

Iペト4：14はキリスト者が社会の中で受ける苦難の宿命とその意義を論じる章節（4：12-19）の中に置かれ、4：12-19全体は次のような3部構成となっている。

- 4：12-13 試練の中で動揺しない勧めとキリストの苦難と栄光への参与
- 4：12 試練の火に対して動揺しないことの勧め
- 4：13a キリストの苦しみへの参与
- 4：13b キリストの栄光に参与
- 4：13c キリストの栄光の啓示を喜ぶこと
- 4：14-15 キリストの名の故に罵られることの幸いと不義を働くことに対する警告
- 4：14 キリストの名の故に罵られる者へのマカリズム（幸いの宣言）
- 4：15 不義を働いて苦しむことに対する戒め

- 4：16-19 キリスト者であることを恥じず、神を崇める勧めと終末の裁きの開始
- 4：16a キリスト者であることを恥じないこと
- 4：16b 神を崇める勧め
- 4：17 裁きの時の開始と神に対して信実でない者たちへの警告
- 4：18 義人と不敬虔な者や罪人との対比
- 4：19 神の意思に従って苦しむ者たちは、善き行いをすることによって創造主に魂を献げる

第1部（4：12-13）と第2部（4：14-15）は、試練の苦しみの中で信仰を貫くことを勧めており、主題上の関連が強い。第3部は（4：16-19）、終末の審判を待ち望みつつキリスト者であることを恥じず、神を崇めることを勧めている。社会生活においてキリストの名の故に罵られることの幸いを語る4：14は、キリストの苦難と栄光に参与することを語る第1部の内容を踏まえつつ、信仰故に被る苦難が神意によることを語る第3部の主題への橋渡しをしている。

Iペト4：14における「キリストの名のためにあなたが罵られる」という句における「キリストの名のために」とは、「キリストと結び付けられるから」、或いは、「キリスト者として」（4：16）ということとほぼ同義であろう<sup>18)</sup>。「キリストの名のために・・・罵られる」ということは、「キリストの名のために憎まれる」（マタ10：22；マコ13：13；ルカ21：17）ということや、「私の（＝キリストの）名のために苦しむ」（使9：16；さらに、使21：13参照）ことに内容的に近い。キリスト教信仰に対して敵対的な環境の中では、「キリストの名を拒まないこと」は、忍耐を要する事柄であった（黙2：3；3：8を参照）。

Iペト4：14の文章の前半は、幸いとされる付帯状況として、キリストの名のために罵られることを挙げ、喜ぶように勧めている。この内容は、苦難の中にある者への幸いを語る点では、Iペト3：14に並行しているが、最も近い並行例は山上



の説教の第9マカリズムの前半部（マタ5：11）に見られる<sup>19)</sup>。第9マカリズム（マタ5：11-12）の文言は、以下の通りである。

μακάριοι ἐστε ὅταν ὀνειδίσωσιν ὑμᾶς καὶ διώξωσιν καὶ εἰπωσιν πᾶν πονηρὸν καθ' ὑμῶν [ψευδόμενοι] ἕνεκεν ἐμοῦ. χαίρετε καὶ ἀγαλλιᾶσθε, ὅτι ὁ μισθὸς ὑμῶν πολλὸς ἐν τοῖς οὐρανοῖς· οὕτως γὰρ ἐδίωξαν τοὺς προφήτας τοὺς πρὸ ὑμῶν. (幸いである、あなた方は、人々が私のために〔偽って〕あなた方を罵り、迫害し、あなた方に対してあらゆる悪口を吐くとき。喜び、躍り上がりなさい、天におけるあなた方の報いは多いからである。同じように、彼らはあなた方より前の預言者たちに対して行ったからである)。

Iペト4：14の文言は、マタ5：11とは語数や語順や文体が大きく異なるので、マタ5：11に依拠しているとは言えない。著者は1世紀末の小アジアの教会に流布していた口頭伝承を自由に引用しているのであろう<sup>20)</sup>。Iペト4：14はマタ5：11に比して遙かに簡潔であり、要約的な印象を受ける。さらに、喜ぶことを勧める根拠について言えば、マタ5：11-12は、来るべき天における報いが大きいことを挙げているのに対して、Iペト4：14は、「栄光と神の霊があなたがたの上に留まっているからである」と述べている。つまり、Iペトロ書は、天国における報いよりも、現在、地上において聖霊が信徒の上に留まること自体を幸いの根拠として強調している。

聖霊が人間の上に留まるという表現は、イザ11：2（七十人訳）に見られる：καὶ ἀναπαύσεται ἐπ' αὐτὸν πνεῦμα τοῦ θεοῦ πνεῦμα σοφίας καὶ συνέσεως πνεῦμα βουλήs καὶ ἰσχύος πνεῦμα γνώσεως καὶ εὐσεβείας（そして、留まるであろう、神の霊が。それは、知恵と理解の霊、意志と力の霊、知識と敬虔の霊である）。Iペト4：14の文言はイザ11：2（七十人訳）を前提にしながら、修辭的な目的のために改変を加えている。Iペト4：14は、メシア王の上に留まる霊の属性を述べる後半部を省略し、τὸ τῆς δόξης καὶ τοῦ τοῦ θεοῦ πνεῦμα（栄光と神の霊）という句に

変えている。また、イザ11：2では、霊が留まるのがἐπ' αὐτὸν（彼の上に）となっているが、ἐφ' ὑμᾶς（あなたがたの上に）となっている。しかも、動詞の時制は、未来（ἀναπαύσεται）でなく現在（ἀναπαύεται）となっている。つまり、イザ11：2は待望されているメシア王の上に留まり、統治の正義と公平を実現するための洞察と思慮を与える霊についての言及であるのに対して、Iペト4：14は読者である信徒たちの上に現在留まっている聖霊（1：2）についての言及となっている<sup>21)</sup>。

他方、聖霊が留まるという表象は、預言の霊が預言者の上に留まることを告げるイザ61：1にも見られる。この箇所は、ルカによる福音書が伝えるナザレの会堂説教の際に、聖書朗読の冒頭の句として引用されている（ルカ4：18を参照）。イザ61：1は、πνεῦμα κυρίου ἐπ' ἐμέ, οὗ ἕνεκεν ἔχρισέν με(主の霊が私の上に留まっている、[主が] 私に油を注いだために)となっている。預言の霊の付与の観念は、他の預言書にも見られるが（エゼ2：3；11：5；ミカ3：8；ヨエ3：1-2）、Iペト4：14の内容は、主の僕の上に主がその霊を置くということを述べる箇所（イザ42：2）が語るところに最も近い。

初代教会にも聖霊によって神の言葉を語るといふ現象が見られる（ルカ1：67；2：25-26；使1：8；2：4；黙19：10；22：6）。Iペトロ書にもキリストの霊が既に預言者たちに働いて、キリストの苦難と栄光を予め証言させているとしている箇所がある（1：11を参照）。しかし、Iペト4：14の後半部が念頭に置いているのは、聖霊の預言の霊としての働きではなく、聖霊が回心の際に与えられ、信徒の中に留まるという表象であろう。初代教会は受洗の時に受洗者に聖霊が与えられるという観念を発達させた（使2：38；ロマ8：15；ガラ3：1-5；4：6を参照）。聖霊は信徒のうちに留まり、生活を導くと考えられたため、信徒が行う善い行いが聖霊の実と呼ばれた（ガラ5：22）。信徒のからだは聖霊を宿す聖霊の宮（Iコリ6：19）と呼ばれ、不道徳な振る舞いによって汚して

はならないとされた。

Iペト4:14後半部は、聖霊をτὸ τῆς δόξης καὶ τὸ τοῦ θεοῦ πνεῦμα（栄光と神の霊）と呼んでいる。τὸ πνεῦμα τοῦ θεοῦ（神の霊）（マタ3:16;12:28; Iコリ3:16;6:11; IIコリ3:3）や、τὸ πνεῦμα κυρίου（主の霊）（ルカ4:18;使5:9）という呼称は他にも見られるが、τὸ τῆς δόξης πνεῦμα（栄光の霊）という表現は非常に稀である。七十人訳聖書において、名詞δόξα（栄光）は、ヘブライ語名詞דָּוָרの訳語として使用され、δόξα（栄光）はヤハウエに帰されている（出15:7;16:7, 10;24:16, 17; 民12:8;14:10; 詩19[18]:2;21[20]:6;29[28]:3;138[137]:5; イザ58:8;60:1, 2;62:2他多数<sup>22)</sup>）。この用語法は初期のキリスト教の礼拝用語に取り入れられ、ローマ書や（ロマ1:23;3:7, 23;4:20;5:2;6:4;8:21;11:36;15:7）、ヨハネの黙示録は（黙1:6;4:9, 11;5:12, 13;7:12;11:13;14:7;15:8;16:9;18:1;19:1, 7;21:11, 23）、しばしは、神の栄光について定型的表現で語る。他方、共観福音書伝承は、δόξα（栄光）を終末時に来臨する人の子に適用している（マタ16:27;19:28;24:30;25:31; マコ8:38;10:37;13:26;ルカ9:26;21:27）。さらに、ルカ24:26は、キリストが苦難を通して栄光に入ったと述べる。ヨハネによる福音書は、神のδόξα（栄光）について語る一方で（ヨハ7:18;9:24;12:41,43）、神のひとり子であるキリストのδόξα（栄光）について語る（1:14;2:11;17:22, 24）。他方、δόξα（栄光）を聖霊と結び付ける記述は新約聖書において非常に稀であるが、霊の務めが栄光のうちに行使されることを述べるIIコリ3:8, 18に見られる<sup>23)</sup>。

Iペト4:14後半部では、栄光の神の霊が宿ること自体が、信徒に神的承認と栄誉を与えることが念頭に置かれていると考えられる。「キリストの名のためにあなた方が罵られる」、つまり、キリストを信じるのが社会の中で誹謗の対象となるのに対して、神は霊を贈ることによって、彼ら

の在り方を承認し名誉を与えているという理解がここには存在している。霊の付与が神の承認の証拠として解釈される例は、使10:44-49;11:15-18;ガラ3:1-5にも見られる。

Iペトロ書は非常に強い終末意識に貫かれている<sup>24)</sup>。この書簡の著者は、冒頭から終末の時に臨んでいることに言及する（1:20）。終わりの時には、キリスト、もしくは、その栄光が啓示される時であり（1:7, 11, 13, 20;4:13;5:1）、信徒に終末を待ち望みつつ、神に希望を託しているとされる（1:3-4, 13, 15, 21）。Iペトロ書によれば、苦難のうちにある信徒たちの栄光は現在の地上の生活においてまだ隠されているが、キリストが来臨する時には明示的な形で啓示される（1:7）。現在自らの苦難を通してキリストの苦難に与る者は、終わりの時に啓示されるキリストの栄光に参与し（5:1, 10）、「色褪せることのない栄光の冠で身を飾る」ことになるのである（5:4）。

### Ⅲ. まとめと展望

(1) Iペトロ書におけるマカリズム(幸いの宣言)の文学形式を用いる際には大変柔軟な態度を示している。人称について言えば、旧約聖書や新約聖書に通例用いられる三人称ではなく（詩1:1;32[31]:1-2;84[83]:5-6;シラ14:1-2;25:8-9; マタ5:3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10;ロマ4:7, 8;14:22; Iコリ7:40;ヤコ1:12, 25; 黙1:3;14:13;16:15;19:9;20:6;22:7, 14;ディダケー1.5;バルナバ1.2;10.10;Iクレ40.4;48.4）、二人称の形を用いている（Iペト3:14;4:14;ヘルマス『幻』2.2.7;『喩え』9.29.3を参照）。

形容詞μακάριοιは、文頭に置かれる慣例（詩1:1;32[31]:1-2;84[83]:4-13;マタ5:3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10他多数）とは違い、文中や（Iペト4:14）文末に（3:14）置かれている。そのため、Iペトロ書におけるマカリズムは韻文の性格が薄まり、散文表現に近付いている。

幸いとされる根拠を与える副詞節は共観福音書におけると同様に（マタ5：3, 4, 5, 6, 7, 8, 9；ルカ6：20, 21）*ὅτι*によって導入される場合もあるが（Iペト4：14b）, *ἐν*で導かれる場合もある（Iペト3：14；4：14a）。

（2）義の故に迫害される者の幸いの主題は、神への信仰故に苦難を受ける者に対して終末的幸いを宣言することは、旧約・ユダヤ教文書や（ダニ12：12のテオドシオン訳；IVマカ7：22）、初期キリスト教文書に出て来る（マタ5：10, 11-12；ルカ6：23；ヤコ1：12；トマ福58；ポリュ・フィリ23；32；ヘルマス『幻』2.2.7を参照）。マカリズムの文学形式は、多くの場合、終末時における運命の逆転を語ることによって、信徒たちに対する慰めと励ましを語る。これに対して、Iペトロ書のマカリズム（3：14；4：14）は苦難が神意であり、苦しみ信徒は神の承認を受け、栄誉を受けていることを強調して幸いを語る。聖霊が信徒の上に留まっていることこそ、神の承認のしのである（4：14）。異教徒が多数を占める一世紀末の社会の中においてキリスト教信仰は承認されず、キリスト教徒たちは様々な疎外や迫害を受けている。しかし、これらのマカリズムは信徒たちに対して彼らは決して不幸ではなく、神の前では幸いとされていることを語る。ここでは、キリスト教信仰に立った価値観と周辺世界の世俗的価値観とが鋭く対立している。

（3）Iペトロ書におけるマカリズム（幸いの宣言）は、山上の説教中に保存されているマカリズムに主題的に近い文言を示している。Iペト3：14の文言は、山上の説教の第8マカリズム（マタ5：10）に類似し、Iペト4：14の文言は、山上の説教の第9マカリズム（マタ5：11-12）に類似する。しかし、両方の場合において、語数や語順や構文の点でマタイの本文から大きく異なっており、直接の依存関係を想定することは出来ない。著者は当時の教会に流布していた口頭伝承を自由に引用しているものと考えられる。

\*本論考は、平成21年度科学研究費補助金基盤研究（C）による研究の一部である。

# （注）

- 1) 旧約・ユダヤ教における幸いの宣言の詳しい分析については、原口尚彰「4Q185 / 4Q525における幸いの宣言」『教会と神学』第42号（2006年）41-68頁を参照。
- 2) 使26：2；Iテモ1：11；6：15；テト2：13にも形容詞μακάριοςは使用されているが、幸いの宣言という文学形式を採っていない。
- 3) J. Dupont, *Les Béatitudes* (3 vols ; Paris : Gabalda, 1958-73) ; H. Frankmölle, "Die Makarismen," BZ 15 (1971) 54-55 ; S. Schulz, *Q. Die Spruchquelle der Evangelisten* (Zürich : Theologischer Verlag, 1972) 76-84 ; R. Guelich, "The Matthean Beatitudes : 'Entrance Requirements' or Eschatological Blessings?," JBL 95 (1976) 415-434 ; G. Strecker, *Die Bergpredigt. Ein exegetischer Kommentar* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1984) 28-49 ; I. Broer, *Die Seligpreisungen der Bergpredigt* (Königstein / Bonn : Hanstein, 1986) ; M. Sato, *Q und Prophetie* (WUNT 2/29 ; Tübingen : Mohr, 1988) 247-264 ; J. Kloppenborg, *The Formation of Q* (Philadelphia : Fortress, 1988) 172-173 ; U. Luz, *Das Evangelium nach Matthäus* (4 Bde. ; 2. Aufl. ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 2002) 1. 267-294.
- 4) 原口尚彰「4Q185/ 4Q525における幸いの宣言」『教会と神学』第42号（2006年）41-68；同「黙示録における幸いの宣言」『新約学研究』第35号（2007年）48-62頁；同「使徒教父文書における幸いの宣言」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第25号（2007年）33-48頁；同「アレクサンドリアのフィロンの幸福理解」『教会と神学』第45号（2007年）21-36頁；同「ルカ文書におけるマカリズム：幸いの宣言と物語的文脈」『教会と神学』第46号（2008年）1-34頁；同「Q資料におけるマカリズム（幸いの宣言）」『新約学研究』第36号（2008年）4-15頁；同「マタイによる福音書におけるマカリズム（幸いの宣言）」『教会と神学』第47号（2008年）57-95頁を参照。
- 5) H. D. Betz, *The Sermon on the Mount* (Minneapolis : Fortress, 1995) 93-94 ; D. Hellholm, "Beatitudes and their Illocutionary Functions," *Ancient and Modern Perspectives on the Bible and Culture* (ed. A. Yarbo Collins ; Atlanta : Scholars Press, 1998) 284-334.
- 6) E. Schweizer, *Der erste Petrusbrief* (Zürich :



- Theologischer Verlag, 1988) 72.
- 7) E. Schweizer, 66 ; J. R. Michaelis, *1 Peter* (WBC49 ; Waco, TX : Word, 1988) 186 ; P.J. Achtemeier, *1 Peter* (Hermeneia ; Minneapolis, Fortress, 1996) 238もこの呼応関係に注目する。
  - 8) J. H. Elliott, *1 Peter* (AB37B ; New York : Doubleday, 2000) 622を参照。
  - 9) Ibid., 623 ; N. Brox, "Der erste Petrusbrief in der literarischen Tradition des Urchristentums," *Kairos* 20 (1978) 182-192 ; idem., *Der erste Petrusbrief* (EKK 21 ; 2. Durchgesehene und ergänzte Aufl. ; Zürich : Benzinger ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1986) 158 ; W. Nauck, "Freude im Leiden. Zum Problem einer urchristlichen Verfolgungstradition," *ZNW* 46 (1955) 68-80 ; G. Braumann, "Zum traditionsgeschichtlichen Problem der Seligpreisungen Mt V 3-12," *NovTest* 4 (1960) 253-260 ; E. Best, "1 Peter and the Gospel Tradition," *NTS* 16 (1970) 109を参照。これに対して, R. Metzner, *Die Rezeption des Matthäusevangeliums im 1. Petrusbrief* (WUNT II.74 ; Tübingen : Mohr, 1995) 7-33は, 編集史的な視点より, Iペト3:14がマタ5:10に依拠しているとする。
  - 10) E. G. Selwyn, *The First Epistle of St. Peter* (2<sup>nd</sup> ed. ; Grand Rapids : Baker, 1946) 78.
  - 11) Elliott, 621.
  - 12) Selwyn, 79.
  - 13) Michaels, 186を参照。
  - 14) 聖書における祝福の概念についての語学的・神学的分析は, C. A. Keller / G. Wehmeier, "בֵּרַךְ," *ThHAT* 1.353-376 ; J. Scharbert, "בֵּרַךְ," *ThWAT* 1.808-841 ; J. Schreiner, "Segen für die Völker in der Verheissung an die Väter," in : ders., *Segen für die Völker* (Echter : Würzburg, 1987) 196-226 ; T. Arndt, *Überlegungen zur hebräischen Wurzel brk* (Leipzig : Thomas, 1995) 49-54 ; C. Gottfriedsen, "Beobachtungen zum alttestamentlichen Segensverständnis," *BZ* 34 (1990) 1-15 ; K. H. Richards, "Bless/Blessing," *ABD* 1. 753-755 ; C. W. Mitchell, *The Meaning of BRK "To Bless" in the Old Testament* (SBLDS 95. Atlanta : Scholar's Press, 1987) ; H.-P. Müller, "Segen im Alten Testament. Theologische Implikationen eines halbvergassenen Themas," *ZThK* 87 (1990) 1-32 ; C. Westermann, *Der Segen in der Bibel und im Handeln der Kirche* (SBB. Gütersloh : G.V.H., 1992) ; ders., "Vom Segen," in : *Das mündliche Wort. Erkundungen im Alten Testament* (hrsg. v. R. Landau. Stuttgart : Calwer, 1996) 180-184を参照。
  - 15) 原口尚彰「祝福と呪いの言葉:ガラテヤ書とヘブライ的レトリック」『新約学研究』第27号(1998年)17-30頁, 同『ガラテヤ人への手紙』新教出版社, 2004年, 145-148頁を参照。
  - 16) Bauer-Aland, 652-653 ; W. Bayer, "εὐλογέω κτλ.," *ThWNT* 2.751-763 ; H. Patch, "εὐλογέω," *EWNT* 2.198-201を参照。
  - 17) Selwyn, 192もこの点を強調する。
  - 18) Metzner, 44-45 ; R. Feldmeier, *Der erste Brief des Petrus* (ThHKNT 15/1 ; Leipzig : Evangelische Verlagsanstalt, 2005) 150 ; K. H. Schelkle, *Die Petrusbriefe, Der Judasbrief* (Freiburg : Herder, 1976) 124 ; L. Goppelt, *Der erste Petrusbrief* (KEK ; Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1978) 305.
  - 19) 並行箇所である平野の説教の第4マカリズム(ルカ6:23)よりも, マタ5:12の方に文言に近い。
  - 20) これに対して, Michaels, 157 ; Elliott, 776は, Iペト4:14がマタイ版Qより原初的なQ伝承の形を伝えているとする。他方, Metzner, 34-38は, Iペト4:14がマタ5:12を改変を加えながら引用しているとする。
  - 21) この点は, Feldmeier, 150も強調している。
  - 22) この言葉の詳しい語学的分析については, Bauer-Aland, 409-410 ; G. Kittel / G. von Rad, "δοκέω κτλ.," *ThWNT* 2.235-258 ; H. Hegermann, "δόξα," *EWNT* 1.832-841を参照。
  - 23) この点は, Hegermann, 1.838 ; Michaels, 264も注目している。
  - 24) Michaels, 184 ; Jobes, 286-287 ; E. G. Selwyn, "Eschatology in 1 Peter," in *The Background of the New Testament and its Eschatology* (FS. C. H. Dodd ; eds. W. D. Davies / D. Daube ; Cambridge : Cambridge University Press, 1956) 394-401.

## Makarisms (Beatitudes) in 1 Peter

Haraguchi, Takaaki

1 Peter displays a very flexible attitude with regard to literary style. It employs the second person plural rather than more frequently used third person plural (see 1 Pet. 3:14; 4:14). Moreover, the Greek term μακάριος is not placed at the beginning of a sentence but rather at the middle (4:14), or at the end of a sentence (3:14).

These makarisms (beatitudes) in 1 Peter (3:14; 4:14) declare the blessedness of their recipients by emphasizing that they are suffering according to the divine will. Suffering believers are recognized and honored by God. It is considered a sign of divine recognition that the Holy Spirit is dwelling upon them. In the eyes of God, they are not unfortunate but truly blessed.

**Key Words :** 1 Peter, Makarism (beatitude), Suffering, Honor, The Holy Spirit